

「!!!tabooOO!!!」

工藤 大嘉

CAST表

CAST表

CAST表

CAST表

・やすお：オナニーを日常に変えようとする青年。

・昌代：やすおの母。おしとやかな専業主婦。

・道康：やすおの父。一家の大黒柱であり、亭主関白。

・性の精：性の悩める所に現れる謎の人物。

CAST表

CAST表

CAST表

CAST表

シーン「オナニーをしている」

やすお 携帯でエロ動画を見ながら陰部を床に擦りつけている

昌代「やすお、ご飯よ。」

やすお 聞こえずにオナニーしている

昌代「やすおー！」

やすお 聞こえずにオナニーしている

昌代 部屋に入る

昌代「やすお、ご飯・・・」

間

昌代 居間に戻ろうとする

やすお「待って！」

昌代 思わず止まる

昌代「・・・」

やすお「母さん、もう止めにしないか？」

昌代「え？」

やすお「もう止めにしないかって言ってるんだ。」

昌代「な、なにが。」

やすお「母さん、いま見たよね？」

昌代「え？」

やすお「僕はオナニーをしている。」

昌代「お、なにー？」

やすお「そう、オナニー。」

昌代「な、なによそれ？おいしいの？」

やすお「とぼけたって無駄だ！保健の時間に勉強したはずだ！木曜日の6時間目ぐらいに。」

昌代「・・・」

やすお「かあさん、僕はもういやなんだ。この、何とも言えない空気間。そしてこの後母さんと過ごす数時間が何より耐えられない。」

昌代「・・・お腹空いたら教えてね。」

やすお 昌代の腕を掴む

やすお「かあさんだつて嫌でしょ。あの変な空気。」

昌代「・・・まあ、ねえ。」

やすお「ご飯の時とかもさあ、なんかこう、気にしてんじゃん。ちら、ちらつて。」

昌代「そりゃあ気になるわよ、なんかいけないことしちゃったと思って。」

やすお「あー：：：そうか。いま問題なのは、僕のオナニーを見てはいけないものって認識があることだ。」

昌代「・・・たしかに、そうね。でもどうやって受け入れたらいいのかわからないのよ。」

やすお「答えはシンプルさ。悪いことじゃないんだよ、オナニーは。」

昌代「それは分かるわよ、悪いことじゃないのは。でもそれを見るのは悪い気がして。」

やすお 昌代の手を掴む

やすお「悪いことじゃない。これはもはや授業参観だよ。」

昌代「授業参観？」

やすお「そう、これは保健の授業参観なんだ、LIVEなんだよ！」

音 クロマニヨンス「ダイナマイト・ブルース」CI

やすお ちんぼこダンスを踊る

昌代「ストップ！ストップ！」

音 OO

昌代「やすお、やすおわからない、全然ついていけないわ。そもそもそれ取れるの？」

やすお「そんなことはどうでもいいじゃないか。」

昌代「どうでもよくないでしょうよ！それはあなたの大事な、その、あの・・・あれでしょうよ。」

やすお「あれってなんだよ。」

昌代「その・・・おー・ちんぼうが。」

昌代 少林寺拳法をする

やすお「大事だからどこにでも移動して身を隠すことができるんだ。それがおー・ちんぼうなんだ。」

昌代「そういうものなの？」

やすお「さて本題に入ろう。これから問題点を洗い出していこうと思う。」

昌代「問題点？」

やすお「今まで母さんが遭遇してきた僕のオナニー現場を再現して、どうして受け入れることが出来ないのかを考えようってわけさ。」

昌代「目には目を歯には歯をってわけね。」

やすお「ははは、ははは、はははは、ちがう。」

道康「昌代ー？まだかー？先に食べるぞー。」

昌代「あ、いま行きますー！」

昌代「やすお、また今度話しましょう、ね。」

やすお「逃がさないぞ！」

昌代「やすお。」

やすお「母さん！このままご飯を食べても美味しくない。」

昌代「・・・」

やすお「問題を解決してからご飯を食べようじゃないか。」

昌代「解決出来るのかしら・・・」

やすお「大丈夫、僕に任せてくれ。」

やすお 「母さん、覚えているかい？僕が初めてオナニーを見られた日を。」

昌代 「・・・そんなの、覚えてないわよ」

間

昌代 「・・・あなたが中学2年生の時よ。」

やすお 「そう、僕が中学校2年生の時、オナニーを始めて間もない頃。」

やすお 「テスト勉強に飽きた僕は、ベッドに寝転びながらオナニーをしていた。」

やすお オナニーをする

昌代 「やすおー？お夜食作ってきたわよー。」

昌代 やすおと目が合う

やすお 「ここだ！ここで何を思った？」

昌代 「え？」

やすお 「この時、かあさんは何を思ったんだよ。」

昌代 「何って、なんだろう。ハッてなって。」

やすお 「ハッてなって?!」

昌代 「見ちゃったと思って。」

やすお 「見ちゃった？」

昌代 「悪いことしちゃったなって。」

やすお 「やっぱりこれだ。」

昌代 「え？」

やすお 「原因はオナニーを悪いこと・恥ずかしいことって考えてるところだ。」

昌代 「・・・」

やすお 「母さんだってオナニーをしているだろ？」

昌代 「え？」

やすお 「・・・ちょっと待ってて。」

昌代 「どこいくの?!」

やすお 部屋から出て行く

昌代 そわそわしている

やすお 手に女性用の玩具を持って戻って来る

音 鬼束ちひろ 「月光」 CI

やすお ゆったり母さんのところに詰め寄る

音 FO

やすお 「かあさん、これは母さんのだね？」

昌代 「・・・え、ええ、まあ。・・・これ肩が凝った時に丁度いいのよねー。ほら。」

昌代 女性用玩具で肩を叩く

やすお 奪い取り 玩具を動かす

玩具 「ウィーン」

昌代「ああ！」

玩具「ウィーーン！」

昌代「あー！」

玩具「ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！」

昌代「あー！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！ウィーーン！」

やすお「これは母さんのだね。」

昌代「…はい。」

やすお「自分もオナニーするのに、なんで人のオナニーはいけないの？」

昌代「それは、オナニーってやっぱり1人で楽しむものじゃない？だから人のオナニーを見ちゃうとなんかこう申し訳ないわね。」

やすお「うーん、確かにそうなんだけど。でもそれじゃあ、問題は解決しないなあ。」

間

やすお「あ。」

昌代「なに？」

やすお「一回、立場を入れ替えよう。」

昌代「え？」

やすお「だから、母さんがオナニーをして僕がそれを目撃する。」

昌代「やすお？あなた言ってること分かってる？」

やすお「ああ、分かっている。ちょっと母さんの気持ちになってみたいんだ。なにか掴めるかもしれない。」

やすお 振り向く

やすお「じゃあ、いつでもいいよ。」

昌代 戸惑いながらもオナニーをする

やすお 振り向く

やすお「うっ…想像以上のダメージだ…」

やすお 膝を突く

昌代「やすお！大丈夫？」

やすお「う、うん。なんとか。」

昌代「ど、どうだった？」

やすお「これは、なかなかしんどいね。母さん、ごめんね。」

昌代「え？」

やすお「こんな思いをさせていたなんて、思いもしなかった。」

昌代「…やすお。」

やすお「荒療治だけど、解決方法を見つけた。」

間

やすお「母さん、付き合ってくれるかい？」

昌代「え、ええ。」

やすお「オナニーの概念をぶっ壊してやる。」

やすお ベッドの上でオナニーの準備をする

やすお「母さん、そこで僕のオナニーを見ていてくれ。」

昌代「え？」

やすお「母さんは僕が歯磨きしてる時、どう思う？」

昌代「どうって、別に……」

やすお「そう、別になにも思わないでしょ。だから、オナニーも歯磨きと同じ様によく見る風景にするんだ。」

昌代「やすお、それはいくらなんでも。」

やすお「ちよつと辛いけど、そこで見ていて欲しいんだ。」

昌代「……」

やすお「それじゃあ、いくよ。」

やすお オナニーをする

昌代「うっ、ああ、んー、ああ、ふうふう。あー、もうだめ！」

昌代振り向く

道康 部屋に入ってくる

やすお「母さん！目を逸らすな！」

やすお・昌代 道康と目が合う

間

道康「何事だ？」

間

道康「これは一体どういうことだ。」

昌代「これはね、そのー、コミュニケーション！やすおとコミュニケーション取ってたの！」

道康「コミュニケーション？」

やすお「母さん無理だつて。」

昌代「そうそう、よく言うじゃない。あれよー、裸の付き合いよ。」

道康「裸の突き合い?!」

やすお「母さん！変なこと言うなよ！父さんこれには深い事情があつてね。」

やすお 道康に説明をする 全員早回し

やすお「つてわけで僕のオナニーを見てもらってたんだ。」

道康「なるほど……ってなるか！」

昌代「お父さん。」

道康「もう限界だ！息子のオナニーを見てる嫁を見て、嫁のオナニーを見てる息子がいて……もうパニックだ！」

昌代「お父さん落ち着いて。」

道康「ニヤァー！」

やすお「父さん？」

道康「ニヤァー！父さんはもう言葉なんて持たない。理性なんて持たない。そうでもしないと、父さんどうにかなつちまいそうだ。」

道康「ニヤァー！」

その場でネコの動きをする

道康「ニヤァー！」

部屋の中を歩きまわる

道康「ニヤァー！」

腰を振ったり歩きまわったりする

道康「ニヤァー・・・ニヤァー・・・ニヤァー・・・ニヤァー・・・」

惨めな気持ちになり、泣く

道康「なんだかとっても惨めだ。」

昌代「落ち着いた？」

道康「ニヤァー！！・・・母さん、何がこんなに惨めか分かるか？」

昌代「え？」

道康「嫁さんがオナニーをしている。こんなに惨めなことはない。」

昌代「・・・」

道康「かあさん、どうしてだ・・・」

昌代「・・・そんな目で見ないでよ・・・なによ、なんなのよもう・・・」

道康「母さん」

昌代「そんな目で見ないで！なによ！あなただってオナニーしてるでしょ！女はオナニーしちゃいけないの?!」

やすお「そんなことないよ！」

道康「やすお？」

やすお「それでいいんだよ、それでいいんだ母さん。僕達、人間には性欲というものがあるんだ。いけないことじゃないんだ。」

道康「なにを言ってるんだ、やすお。女性には女性の在り方というものがあるんだ。母さんがオナニーしているのを想像するのも嫌だ。考えてもみる。母さんは父さん以外の男とセックスするのを妄想して快楽を得ているんだぞ。浮気されてるのと変わらないじゃないか。父さんは認めんぞ。」

昌代「あなただって、オナニーしてるじゃない。」

道康「男性にはな、子孫を残す本能が備えられているんだ。より多くの子孫を残そうと種を撒く本能がな。だから仕方のないことなんだ。」

昌代「なによ、それ。それじゃああなたには理性ってものがないの？本能を抑える理性がないならただの動物よ。そこら辺で腰降ってる犬と一緒にじゃない。」

道康「おれを犬呼ばわりか、お前いつからそんなに偉くなったんだ？」

昌代に歩み寄る道康

昌代「・・・」

やすお「やめなよ、父さん。」

道康「いつからそんなに偉くなったんだと聞いているんだ。」

更に歩み寄る道康

昌代「・・・困ったらすぐそうやって・・・」

道康「そうやって？なんだ？言ってみろ。」

昌代「そうやって自分の権力を押しつけてくるのよ！稼いでくるのが、そんなに偉いの？」

道康「なんだと？！」

道康 昌代に平手打ちをしようとする

シーン「性のお悩み？」

音「Amazing place」 CI

戸惑う3人

性の精 どこからともなく現れる

音FO

間

性の精「呼んだ？」

やすお「いや、呼んでないです。」

性の精「馬鹿な事を言うな！」

やすお「え？」

性の精「呼ばれてないのに私が来るわけがないだろう！」

やすお「なんで聞いたんだ。」

道康「なんだお前は？！」

性の精「わたしは性の精だ。」

道康「性の精？」

性の精「性に悩める所に我、現る。今回はどんなお悩みだ？」

道康「よく分からんが帰ってくれ、別に悩みはない。」

性の精「馬鹿な事を言うな！悩みがないところに私が来る訳がないだろう！」

道康「なんなんだこいつは。警察呼ぶぞ！」

性の精「警察はやめてくれ。頼むから警察はやめてくれ。」

昌代「性の精さん！悩み、あります！」

性の精「はっはっは、やはりそうだったか。一瞬ひやりとした。それでどんな悩みだ？」

道康「昌代！」

昌代「主人が・・・私にオナニーをさせてくれないんです。」

性の精「ほうほう、奥さんにオナニーをさせないと。ご主人、なぜ奥さんのオナニーが許せない？」

道康「お前に答える義務はない。とっとと出て行け。本当に警察を呼ぶぞ。」

性の精「呼びたいなら呼ぶがいい。奥さんの顔を見て、わかった。これは深刻な状況に陥っている。警察など構うものか。」

昌代「性の精さん・・・」

道康 警察に電話する

道康「あー、すいません。不審者が自宅に侵入してるんで、来てもらってもいいですか？すぐにお願ひします。」

性の精「電話は終わったか？」

道康「ああ、お前はもうすぐ警察のお世話になるんだ。」

性の精「なぜ奥さんのオナニーを許せないんだ？」

道康「だからなんでお前なんか言わなきゃならないんだ。」

性の精「言わないと不思議な力で言わせるぞ。」

道康「な、なにすするっていうんだ。」

性の精 道康をボコボコにする

やすお「やめろよ！なにすするんだよ！」

性の精 殴り続ける

道康「わかった、言う、言うから！」

性の精 殴り続ける

道康「言うって言うてんだろ！」

性の精「すまん、聞こえなかった。」

道康「・・・嫌なんだよ、他の男を想像してるのが。」

性の精「なるほど。奥さんを独占したいということだな。」

道康「・・・」

性の精「しかし、お前もオナニーをするだろう？まさか、毎回奥さんを想像してオナニーしているわけじゃないだろ？」

道康「そりゃ、そうだけだよ。男は仕方ないだろ、そういう生き物なんだから。」

性の精「男は仕方ない、それはどういことだ？」

道康「男には子孫を残そうとする本能があるんだ、だから種を撒くのが当たり前なんだ。」

性の精「なるほど、チビスケお前は どう思う？」

やすお「え？」

性の精「お前は どう思うと聞いているんだ？同じ男だろ？どう思う？」

やすお「僕は、僕は、オナニーしてもいいと思う。男も女もみんなオナニーしたらいいんだよ。」

性の精「チビスケなんでそう思う？」



性の精「体の調子はどうだ？」

昌代「え？」

性の精「オナニーした後、体の調子はどうだ？」

昌代「なんか、体は軽くなった感じがします。」

性の精「なるほど。聞いたか？旦那さん。」

道康「ん？」

性の精「奥さんのオナニーにはストレス発散効果がある。どうだ？奥さんのオナニーがビールを飲んでるように見えないか？」

間

道康「いや、見えない。」

性の精「もっと、想像力を豊かに！」

間

性の精「ビールを飲む位、日常にするんだ！」

間

やすお「日常？」

性の精「じゃあ、一回ビールを飲んでみる！」

道康「は？」

性の精「奥さん、一回ビールを飲んでみてくれ！」

昌代「え？」

性の精「いいから早く酒を持ってこい！」

昌代「あ、はい！」

昌代 居間へビールを取りに行く

やすお「そうか、やっぱり僕の考えは間違いじゃなかった。」

やすおビールを取りに向かう

道康「やすお！どこに行く?!」

やすお「世界をぶっ壊しに行ってくるぜ！」

やすお 昌代を追う

間

性の精「二人つきりだな・・・」

道康「あ、ああ。」

性の精「ジャンケンでもするか？」

道康「・・・いや、いい。」

性の精「そうか・・・あれだな、なんか話すか？」

道康「・・・」

性の精「どこに惚れた？」

道康「え？」

性の精「奥さんのどこに惚れた？」

道康「だから、なんでお前みたいに変な奴にそんなこと答えなきゃいけないんだ。」

性の精 殴ろうとする

道康「分かった！言う！言うから！」

間

道康「んー、なんか恥ずかしいな。」

性の精「恥ずかしがることはない、言ってみろ。」

道康「・・・笑顔。」

性の精「ん？」

道康「・・・やっぱり恥ずかしいな。」

性の精「恥ずかしがるな、殺すぞ！」

道康「・・・笑顔だよ、笑顔。」

性の精「笑顔？」

道康「ああ、笑顔。昌代はいつだって笑顔なんだ。俺が会社を首になって、もうどうしようもないって時に・・・あいつ・・・笑ってんだよ。」

性の精「・・・」

道康「何がそんなに可笑しいんだよって・・・」

性の精「・・・」

道康「そしたら、笑ってた方が楽しいよって・・・なんかもう、会社のことなんかどうでもよくなっちゃって・・・あの笑顔に何度も救われたんだ。」

性の精「そうか・・・」

サイレンの音が響く

性の精「どうやらお迎えが来たようだ。旦那さん、その気持ち・・・大切にな。」

昌代・やすお 戻って来る

やすお「性の精さん、やばいよ警察来てるよ！」

性の精「奥さん！・・・笑顔、大切にな・・・チビスケ・・・」

性の精 頷く

やすお 頷く

性の精 どこからともなく去る

やすお 昌代・道康にビール渡す

昌代「やすお？」

やすお「オナニーを日常に変えるんだ！」

やすお「ビールを飲みながらオナニーをするんだ！」

昌代・道康「え？」

やすお「ビールを飲む〓オナニーにするんだ！」

昌代「でも・・・」

やすお「そして、父さんは母さんのオナニーを、母さんは父さんのオナニーを見るんだ！」

間

やすお「もう、これしか道は無いんだ・・・」

昌代「やすお・・・」

道康 オナニーを始める

昌代「あ、あなた？」

道康「母さん、もうこれしか道はないんだ。」

昌代 オナニーを始める

道康・昌代 苦しむ

やすお「父さん！母さん！」

間

道康「はあはあ、昌代・・・笑ってくれ。いつもの笑顔を見せてくれ！」

昌代「道康・・・」

道康「苦しい時こそ、笑うんだよ。それを教えてくれたのはお前だろ？」

昌代・道康 笑う

ぎこちない笑いが徐々に楽しげな笑いに変わっていく

道康「こ、これは・・・やっぱり、オナニーは最高だ・・・」

シーン「おかしな日常」

やすおがオナニーをしている 昌代入り

昌代「やすおー、洗濯物ここに置いておくわよー。」

やすお「うん！」

昌代 頬笑みながら居間へ戻る

チャンチャン